



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

31

ロマン・ロラン

魅せられたる魂Ⅲ 宮本正清訳

中央公論社

ロマン・ロラン

訳者 宮本正清

Title: L'ÂME ENCHANTÉE
Author: ROMAIN ROLLAND

Originally Copyrighted by
Albin Michel, Paris.

This book is published in Japan by
arrangements with Albin Michel through
the Bureau des copyrights français.

本書は日本版權所有者たる「みすず書房」
の許可によって刊行されるものである

昭和38年8月1日初版印刷
昭和38年8月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 中央精版製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話 (561) 5921(代) 振替東京34

目次

魅せられたる魂 Ⅰ

六 予告する者 (中)

出産 Ⅰ

七 予告する者 (下)

出産 Ⅱ

ピエールとリュース

解説

年譜

5

299

447

510

514

魅せられたる魂

■

六 予告する者 (Anna nuncia)
(中)

出 産 I

第一部

闘い

彼らの恋の初期は陶酔的だった。蜜月は太陽のように燃えた。その蜜の中にはかくされた火が、アルコールがあった、どんな草木から二匹の蜜蜂はそれを吸いとったのか？ それはけっして春の花からばかりではなかった。彼らは二匹とも早熟に夏の樹液を味わったのだった、しかしその中には、かなりきつい、そして焼きつくすようなものがあった。若々しい恋はそれらを蒸溜器の中で混合して、すばらしい媚薬をつくった。すべてが新しく、すべてが清純で、すべてが焰だった。火焰によって更生しない、洗われないものが何かあるのか？（しかしそのあとには何が残るだろうか？）

彼ら、狂った小鳥たちは、昼も夜も口と口とをくっつけて、息を吸いながら、すべての爪でたがいにかまり合っていた。それはちょうど衝角をつけた軍艦が、要塞の中までぐっと深く突っこんでしまったかのようにだった。

彼らは幾日も幾夜も部屋の窓をなかばしめたままで、外出することを拒み、あけることを拒み、たがいに貪りあい、決して飽きることもなく、疲れ切っていた。

やっと扉を押しあけることができたアンネットは、寢床の上に彼らを見いだした——彼らは少しも隠れようとはしなかった——酔いしれ、ぎよろっとした眼つきで、幸福で、疲れはてて、熱と逸楽に燃えていた。そしてアーシャは、彼女の若者の頭を抱きしめて、むさぼるような、野性を帯びた眼で、アンネットに挑戦していた。しかしアンネットは、優しげに彼女をながめ、両手で二人の頭を抱きしめ、顎を振って、微笑し、気にかかる様子で言った。

「あたしのかわいそうな子供たち……小麦をみんな食べてしまわないようにしなさい！ 悪い季節のために取っておきなさい！」

彼女は自分の言うことを彼らが聴かないのをよく知っていた。彼女は爪先で歩いて去った。淋しくもあり、嬉しくもあった。彼女には未来があまりにも見えすぎていた。しかし彼らがこうした現在をもつことは美しいことだった！ それだけ救われたわけだ！ 彼女はそれが少しも乱されないようにと心をくばった。それを彼らには言わずに（アーシャはあとでそれを知った。男子らしく暢気なマルクは永久にそれを知らなかった）彼らの世帯

のめんどろを見てやった、そうした迷いの数週間、彼らには自分たちがしなくても家事は当然ひとりできするもののように思われた。彼女は彼らの日傭い女で、人目につかないように黙って万事を整頓した。アーシャは、溺れていた酔心地からさめはじめ、重くなっていた頭が自由になろうと努めるようになり、自分の家の中を行ったり来たりする活動的な人影の軽い音に耳を傾けるようになる、おそらく感謝の念よりも先に彼女の自尊心がめざめた。(恋人たちは世界が自分たちに奉仕し、足に接吻してくれるのが当然だと思っている。)彼女がひさびさにやっと足をはこんだのは自分の家庭の支配権を要求しに行くためだった。食堂を掃いていたアンネットは、アーシャが素足に寝巻のまま、まるで納屋の隅からとつぜん日向に出てきた梟の子のように眼をぱちくりさせて入ってくるのを見た。彼女は笑って箒を投げた、そして駆け出して行って彼女を抱いた。アーシャは生真面目な顔をして——(彼女はまだ笑うまでに醒めていなかった)——王女かなんそのように抱擁を嘉納して、アンネットの膝にすわり、彼女の頸をつまんでしかつめらしくみつめていた。頬の上に拇指をあてて、彼女の顔を横に向かせ、その横顔を検めた。それから両の頬を指でつまんで、相手の眼にじつと見入った。そしてこの接触によって、鋼鉄のような眸が和らぎ、硬い指が弛められた、

そしてまだ湿っぽい手でアンネットの口を撫でた。アーシャは言った。

「ありがとう」

「そんなこと別に言ってほしくないわ」とアンネットは言った。

「あなたが言っているのはいいかどうか、そんなことあたしどうでもいいんですわ。あたしは言いたいんです。ありがとうって！」

「何があがたいの？」

「あの人を作ってくれたことを」

アンネットは彼女をしつかりと抱きしめた。

「よくできてるの？」

「ちようどあたしの寸法にあつてます！」

笑みをふくんだ二つの眸がぶつかった。それに挑戦してはならなかったらう。二人のおしゃべりの女は善い神様の善い物を讃美するのになんの気がねもなかった。しかしアンネットは快活な謙遜さで言った。

「あたしたち母親というものは、男の子を半分しか仕上げないものです。仕上げるのは、これからあんなの仕事ですよ！」

「あたしもう仕事をはじめたところなんですの」

「まあ！でもそれは一晩でできる仕事じゃないのよ。むずかしい仕事です。ずいぶんあんなは手をかけなくち

やいけないでしょう。あんたは辛抱のいい方なの？」

「ちっともいい方じゃないんですわ！」

「おや、おや、おや！……」

「あれが辛抱づよいならたくさんですわ」

「あたしは保証しませんよ」

「それじゃあたしお返しするわ。あたしをだまして品物を売りつけたのなら」

「じゃもしあんたの言うことを言葉どおりにとったら？」

「あたしが彼を取りもどしたら？」

「だめでしょう？ やってごらんさいね！」

彼女は挑戦的な態度であとずさった。

「静かに、静かに、お嬢さん！」 アンネットは言った。

「何も危険はないんですよ。今のままでいらっしゃい。

それがものの順序です。あんたはあたしの息子を取ったのですわ。あたしはあんたの息子を取りましよう」

「まあ！ それまでにはね！」 アーシャは言った。

「あたしは自分の収穫をして、食べますわ。種の世話はおつと後にしましょう」

「夏があまり早くこないように用心なさい！」

「あたしは夏はこわありませんわ。火は好きですもの」

「あたしはそこを通ってきました」 アンネットは言った。

「あたしはその匂いを嗅ぎました」 鼻をうごめかしなが

らアーシャは言った。「隅の方ではまだ焦げくさい匂いがしてますわ」

「火は消えてるんですわ」

「保証なさるの？ あたしが灰をかきまぜますよ！」

「いえ、いえ、いけません！……あたしは二度とやりたくありません。めいめいに順番がきます。火はあんた

ちの番ですよ。大切にしてください」

「火はいつでもありますわ！」

アンネットには自分の懷疑があった。しかしそれを口外するのはけっして慎重ではない、若い人々はかえって

よくなんでも知っているのだ。火の神様が彼らをお護り

くださるように！ 人はそれをどうすることもできない。

火は何も聞こえない。耳もなく、眼もない。舌があるだけだが、それは話すためではなく、焰を投げるためだ。

——その舌は何ひとつ残さないうで焼きつくす。彼は餓えている。ひっきりなしに他の食物を彼にはこんでやらなければならぬ。マルクとアーシャにはアンネットが推

量していたよりも多くそれがあつた。彼らの心は、初期

の欲びの大火の後で、なお幾月も燃えつづけた。彼らは

欲望の焰の上に眼^{まなこ}を伏せて、日々の仕事の生活をふた

たび始めた。しかし眼^{まなこ}を上げると、たちまちその焰は

燃え立った。彼らの貪るような眼は、ファルネシナの夫

婦のそのように貪り合つた。彼らはいつまでも満たさ

れそうにも見えなかった……

それから、たちまちにして、火は消えた。そして闇と
なった……

*

災禍は彼ら二人をいっしょにおそいはしなかった。べ
つべつにおそった。最初に、アーシャが打撃をうけた。

彼女は外出しようとしていた。マルクとはいま別れた
ところだった。彼らはたがい喰み合ったのだった。部屋
の回転窓掛はしまっていた。外には太陽と通りの轟音
寝台の上にすわったアーシャは頭もからっぽだった。疲
れて、少しもの悲しく、嘔吐を催しかけていた。部屋
中はうとうとしかった。彼女は回転窓掛を上げた。日光
がさしこんだ。彼女は頭髮を直すために両腕をあげて、
姿見の中に自分を見た。眩しい日光のために彼女は気分
がわるくなった。彼女は瞬いた。臉が下りて、上がるま
での短い一瞬間の沈潜……彼女がふたたび眼をみひらい
た時には、もはや周囲は同じではなかった。つづいた二
つの瞬間に連絡がなかった、両者の間に奇怪なひとつの
隙があった。道を探る盲人のような眼をした女は、もは
や彼女の影も日光も見いださなかった。彼女はもはや愛
を見いださなかった。めまいがした。彼女は壁にもたせ

た円腰掛にすわりこんだ。頭の上で組んだ二つの手を離
す力さえなかった。それは円柱の上端の柱頭のように彼
女をおし潰しそうだった。うちのめされて彼女は前方を
ながめていた。何も見えなかった。なんのことも考えな
かった。『無』を考えていた。心の中は無だった。頭
の中も無だった。完全な空虚。過去の跡ひとつなかった。
過去をみつめ、それにすがりつこうとした時に（彼女は
塔から落ちるような心地がした）、彼女の血は凍った。
すべてが彼女にとって見知らぬものとなった、この男、
彼に触れたこの肉体、彼の歡喜の思ひ出、裸の、身を任
せたこの女、このアーシャ（愛する……愛する……）。
彼女はなんのことともわからずに、この死んだ二つの綴
音を繰り返していった。どんな戦慄も、どんな感情もそ
れに比べるものはなかった……彼女は自分に言った。

「あたしは氣違いだ。あたしにはよくわかつている、あ
たしが愛したということとは……」

しかし幻覺に憑かれた彼女の意識はそれに応酬した。

「何？ これは何だろう？ 自分にはわからない……」

彼女は幾時間も片隅にしゃがんで、身動きもしないで
錯乱のうちに過ごした。夕暮れが迫ってきた。教会の大
時計がやがて『相手』が帰ることを彼女に思い出させた。
彼女は飛び上がった。起きて、髪をゆい、顔を直した。
悲しげな、きつい自分の眼の奥に、鏡の中に、彼女はふ

たたび『虚無』を見た！ その上にヴェールを掛けた。それをあらわに示すことができなかった……相手にたいする憐愍か、それとも自分にたいする恐怖か？

彼は何も気づかなかった——（恋する者たちは自分でいっばいだ）——そして眼の潰れたこの利己主義は不毛の深淵をさらに深く掘った。それにたいして彼女が感じた怨みは、彼女の眸の上にかかつていたヴェールを破った。彼はそこに入りこんだ、そして沙漠を見いだし、啞然となった。しかしヴェールはふたたびかけられた。彼はそれをまたかかげてみようとはしなかった。彼の質問に彼女は答えた。

「なんにも」

彼は強いてきくのを控えた。怖かったのだ。

その夜、彼は一つの死んだ肉体、しかも生きている、彼の欲することに受動的に従う肉体——生命がからっぽになった肉体——を抱いていた。——彼が知っていた生命、彼の富はもうそこにはなかった。ありがたいことには、彼は闇の中にひそんでいるもうひとつの存在、氷のような眸で彼をうかがっていた者を見なかった。彼はそれを見なかったにしても、その冷たさを感じた。抱擁の途中で、彼はその体を放した。それはされるままになった。——彼女は身動きもしないでいたけれど、まるで彼の手から離れて落ちる石のように思われた。寝台の上に

向き合って息を殺して、彼らは眠ったふりをしていた。しかしめいめいが相手をうかがっていた、心も手足もちぢまっていた。

「これは何者だろう、自分の前にいるのは？……」

アーシャはマルクが眠っていると思いこんで、それを利用して、身をはずした。ごくゆっくりと向きをかせ、彼に背を向けた。マルクは彼女の動作を、逃げ出す陰險な動物の様子をみるようにつけていた。そして彼は悩ましく心に思った。

「自分は彼女に何をしたのか？」

アーシャは自分の背に呼吸を感じたが、しかし自分の前は、寝台はからっぽで、自由な闇だった。彼女はのがれた、その森の中へ……幸いにも狸寝がほんとうの眠りに変わった。眠りは二人の子供をおそい、追跡のうちに彼らを凍らせた。夜が明けたときに、彼らは、心を痛めはしたが軽い気持になっていた。あまり顔を見ないで微笑をかわした。マルクはアーシャの怖るべきことを知った。アーシャは、自分で、自分の怖るべきことを知った（それはいつそう悪かった！……今後何が起こるのか、彼女はもう安心がならなかった……）。

その後、こんどはマルクの番がきた。深淵が口をひらいた。その翌日、恋を追い求める時刻——情欲と恋の悦び以外には何も考えない時刻に、彼の心に完全に恋の欠

如が生じた。愛する女はもはや死んだ重荷以外の何物でもなかった。その冷淡さがじつにひどかったので、それは嫌悪の線にさわりかかっていた、憎悪にほんの紙一重というところだった。内部の革命は、物音も、衝突もなく行なわれるだけ、いっそう怖ろしかった。成し遂げられてから、人はそれに気づいた。マルクはそれを目撃して慄然となった。恋にたいする忠実さゆえに自分をため、自分を罰した。しかしどうにもならなかった。もうできてしまった災禍の前に立たされたのだった。ありったけの力も、その廃墟を相手に隠すには多すぎなかった。それでは不十分だった。自分の経験から、勝手がわかっていたアーシャは廃墟を嗅ぎつけた……

彼らは替わり番にそこを通った。けっしていっしょではなかった。それはときには数時間、ときには数日間つづいた。この現象は、繰り返されるにつれて長引く傾向があるように思われた。最初の打撃のような激しさはもはやなかったが、かえっていっそう憂鬱で、いっそうがっかりさせた。それは生活への味覚を奪った。彼らはそうした襲撃をたがいに打ち明ける勇気がまったくなかった。それを恥ずかしい病かなんそのように隠しあつた。そして沈黙の中に、病は慢性になり、そこに固着した。彼らに教訓をあたえることのできる唯一の人アンネットは、彼らから遠ざけられていた。そして彼女も彼らの世

帯によけいな口をはさむことを差し控えた。彼女は嫁の邪推ぶかい氣質を知っていた、彼女の信頼を得るためには、それを少しも求めないに限った。それに彼女は彼らにだまされていた。あまりの高気圧の後にくる避けがたい気温の低下を予見し、待っていたくせに、低気圧が生じた今となっても、彼女はいっこうそれに気がつかなかった。それというのも、子供たちはそれを彼女に隠すことには一致していたからだだった。彼らの家庭は、愛の基礎が動揺しているこのころほど和合しているように他人に見えたことはなかった。彼らは、不健康なように、原因のない病氣のように思われることを白状するのを恥じていた！

といつても、どちらも恋にかけては新米ではなかった。彼らはすでに飽きるほど味わっていた。ただこれまでの彼らの経験はどれも今度のほど強烈ではなかった。それまでは、責任のある本当の愛ではなく、むしろ遊戯に出かける若々しい情欲、遊戯のよるこびだった、何も不健全なものはないが、何も深刻なものもなく、気軽に自分を試しもし、過ちもする自然の暢気さだった——自然にはゆっくりやる時間がある！——もし偶然にその遊戯にひっかかって、自然は腹を立てて、その遊戯をひっきりかえす、ちょうどシルヴィがマルクを罵（ののし）る中へ押しこんだときに、彼が立腹してやっと同じように。

しかしこの場合には、なんの罫も、なんの遊戲もなかった。自由に提供され、自由に受け容れられたすべての生活が問題だった。彼らはすべてを語り、すべてを示した。すべてを取り、すべてをあたえた。その愛の中に生命の急流をことごとくそそいだ。だからこそ（ところが彼らはそのことを理解できなかった）、いっさいをそそいだので、彼らには何も残っていなかった。ただの一滴も！ 愛が減水すると、生命の急流は涸渇した。彼らは坐礁し、難破しかけていた。

理解と同情をもって、たがいに詫び、そうした危機には、自分の身を退いて、退潮が終わり次の潮が満ちてくるのを待つような賢明さに達したのは、それからずっと後のことだった。なぜなら、それは要するに生命のリズムであり、またその振動以外の何物でもなかったからで、生命が惜しみなく消費されればされるだけその振動は大きかった。収縮の後には必ず飛躍がきた——反復される打撃が激しいために弓の弦がひどく張り、心の発条が狂わないかぎり……

弓は良かった。けれど射手は自信を失くしていた。生命の泉がふたたび開いた時にさえ、彼らは早魘の時期のことや、その折りに自分たちがどんなふうに見合ったかを忘れることができなかった。

彼らは眼隠しをして、顔を見るのを怖れる恋人ではな

かった。恋のどの瞬間にも、たがいにありのままを見ていた、ウェールをかけずに、裸体のまま、弱点も、醜い点も、悪徳も見えていた。誰にも、もっとも美しい、もっとも善良な人々にもそれはある。二人とも鋭い眼をしていて、そしてすべてを見、すべてを示すことを誇りとしていた。心の死の時期がくると、彼らは自分がかつて知っていた何物も伴侶の心の中に見いださなかった。ところが問題は物の見方にあった！ 彼らが愛しあっているときには、醜ささえも愛した。それを（ひそかに）おそらく美点よりも愛したのだろう。愛人はそのためにいっそう自分に近く、いっそう身を委ね、いっそう感動的に見える。ところが愛が虧けたときには、影と光彩がなんと変わるのだらう！ 同じ線の形が崩れ、怪奇な嫌らしい点が強くなった。なんとという不幸か！ 前にはどうして愛したのか——どうして我慢ができたのか？……一生自分のそばにおいてながめなければならぬのにどうして我慢ができるのか？ 月蝕の終わりがきて、かつて自分が知って愛していた景色の跡を、真昼間にながめて安心しようとしても駄目だった。いちど見たものはもう忘れなかった。不安気なアーシャの眸は愛人の顔や動作を探ろうとやっきになっていた。自分が観察されているのを感じて、彼も相手を観察した。その後で、たがいに相手の腕に身を投げた。一種の鬱憤、自分にたいするは

らだたしき、自分を失う怖れをもつていつそう愛しあつた、すまない！ すまない！……

しかし濤はふたたび深い淵をつくり、盛り上がり、低まり、また高まつた……彼らはそれをひきとめることはけつしてできないのを知つていた。彼らにはもはや安全がなかった……

もちろんだ！……恋の上にはなんの建築もできない。

彼らはそれを知つていた、知つてゐるはずだった。人生はひとつの作業場で、そこには休業はない。のらくら連にあたえる地位はない！ まっすぐに恋に行け。よろしい！ しかしパンと同じことだ！ その代償は仕事によつて払うべきだ、働かない者は食うべからず、パンも恋も同じことだ。これは鉄則だ。もし寄生虫がそれを免れることができたとしても、罰はその内部に在る。盗んだパンは喉につまる。それは自分の快楽の上で嫌悪のために死ぬ。否！ 人はパンと恋のみによつて生きるものではない……働け、そして創造せよ！

*

たとえ彼らがそうしたいと思つても、マルクとアーシャは、口と口をつけて、恋の寒暖計の昇降に感動してぶらぶらしていることはできなかった。二人とも日々の生活を稼がなければならなかった。マルクはラジオ機

械の販売と取りつけをする商店に勤めていた。アーシャはある出版業者のためにロシア文の翻訳の仕事をしてた。彼女はまたある輸出商のために商用文を翻訳してタイプしてゐた、顔をあわせるのは食事のときだけで、しかも晩はかなり遅かつた。しかし仕事はけつして『別の考え』ではなかつた。その考え事は空氣の流通しない片隅につもつて、発酵してゐた……『別の考え』、わびしい、焼けつく砂原を泉に向かつて、星の光る夜の中を歩んで行く隊商の消しがたい慄れ……

『おお、夜よ！ おお、泉よ！……自分は生温かい、味のない、濁つたおまえを見いださなければならぬのか！ 自分の渴は癒されないでいつそうひどくなる……』

彼らは、毎夜、ふるえわななく期待と、ますます貪るような要求をもつて接し、満たされないで離れた——失望を告白する勇氣がなかつた。しかしマルクが追求にやつきになり、そして彼女が彼からのがれるにつれて、彼は愛人をより深く占有しようとした。また彼は彼女の土地や彼女の思想のどの隅々にも足を踏み入れないところはなかつた。すると彼女は腹を立て、傲慢な怨めしい氣持で、自分の心の中にある愛の境界にたいする意識を回復してきた。

「あたしは自分の扉を開けます、自分で開けたいのですから。お入りなさい！ しかしここまでですよ。それ以